

## 短歌季評

今号は、読売新聞の「読売歌壇」(二〇二二年十一月二十八日)を取り上げたい。「読売歌壇」は、朝日新聞の「日曜歌壇」に比べれば、まだまだである。

小池光選の「おそらくはただ一人なる読者とし父の遺しし日記読むなり」(吉村一)も、親子の命の引き継ぎが底流しているし、栗木京子選の「保護者らに寄付を募りて設置せしすべり台虚し廃校の庭」(渡辺照夫)も、廃校の現実に対する哀惜が脈打っている。思いや感情が留められている点は、朝日新聞「日曜歌壇」よりもいくらか深い。ただ、俵万智選の歌は、ママゴトや子供の遊びの発想をもって、新しさを醸造する幼稚さが、あまりにひどい。「大規模な相合傘しませんかひとつの屋根の下で暮らして」(関根裕治)「更地にはマンションが建ち新しいクロスワードのやうに灯火が点く」(瀬川幸子)「秋風にプラグさしみ充電をするようなあの子の前ならえ」(紺屋小町)など、ただ風景や生活を新しいものに重ねて現代的なものに仕立てているだけで、そこに歌われているものの内質が実は貧

困であることにまったく眼を向けていない。「秋風に」の歌は「プラグさしこみ」と乖離してしまつて意味不明である。こういうものを選んでいくことは、若い頃の「サラダ記念日」よりも進歩していき、むしろ俗悪浮薄化しているのではないかと疑いたくなる。

黒瀬珂瀾撰の歌は「ロシアより白鳥の来て冬が来てダーティボムのニュース飛び交ふ」(井原茂明)など社会や戦争に一方で目が向いているが、一方で季節と鳥を描く対比に、強い結節がなく、目先のおもしろさに墮している。読売歌壇は、毎回選者が三首を選んでコメントを付けているが、それに外れた歌の中にいいものが散見される。

総じて、俵万智を除いて、朝日歌壇よりも、感情の汲み取りは深い、チグハグな選り方も目に付く。また、体言止めの歌が多く、これが必然的な表現であるとするには、あまりに流れが悪く、ギクシヤクした人工的な組み立てに陥っているものが多い。ほとんどの歌に、調べや流れの良さが感じられないのは、日本短歌の伝統の美点を損ねている。母音を伴った日本語は本来もつときれいな流れと調べが可能はずだ。

また、歌の流れが悪いのと同時に、全体的に言えるのは、自然の息づきや気配が乏しいことである。自然はどこへ行ってしまったのか、都会の生活の逆の貧困が、感受性を乏しくしているとも言える。確かに、この便利な現代社

会では、機械化や自動化が進めば進むほど、自然はいらなくなり、家と会社などの勤め先と通勤手段や移動手段があればそれで生きていける。それは科学機械文明が進めば進むほど自然な成り行きと言えるが、ひとたび地震や台風、あるいは原発事故などの災害が発生すれば、その落差が凶器となつて跳ね返ってくる。自然を感じることは大きな力を感じることであり、その中で生かされている有限の命を見つめることに繋がる。歌はその有限の何かを見つめ、感じ、それを尊ぶことに繋がっていくはずだが、現代のこれらの短歌には、その回路が見えない。これほど恵まれた何かを与えられながら、それが見えなくなっていることが貧困なのであつて、現代の短歌の貧困は、この本質的な見えない貧困に根差しているように思える。自然が見えず、感じられなくなるとき、その恩恵も、その凄まじい力も見えなくなると危険に晒される。現代はそういう時代であることは疑いないが、だからこそ、あえて鋭敏な方向に、例えば短歌を媒介にして感覚を研ぎ澄ませていく必要がある。

角川の歌誌「短歌」も全体的にこの喪失の方向へ流されている。二〇二二年十二月号を見る。

巻頭の香川ヒサ「アライグマ五匹捕獲しこの街に地震戦争起こらず一日」「何が起こるかかわからないのは人間が何を起こすかわからないから」など、全体的に短歌としては空回りが多いが、最初の一首だけはよく、「街路樹にあれば

古い木は行く人に蔭差しかけて一夏ありき」は面目を保っている。花山多香佳子「朽ちはてて尖るかたちの切り株が林のなかにまた見えてくる」「見あげたる木より滴るむらさきは葛の花 夫とともによるける」は、詠嘆の結晶度が低く、末尾がよるけている。全体に調べがあまりにぎこちない。

渡辺松男「屋根の上に男があたり旻天へ私は屋根を消して浮かせる」「ひたすら後退するわれありぬ青空に窓枠生じ室内生じ」イメージや虚像の奇を衒つた表現は、よく伝わらない上に、流れが悪く、胸に残らない。

巻頭の三人がこんな風で、あとは大体似たり寄ったり、もつと悪いのもあるが、現代の日本短歌のトップレベルがこんな具合ということはよくわかった。正岡子規や斎藤茂吉がもし生きていて、このような日本短歌の現状を見たら、嘆くに違いない。

何よりも、日々遠のきつつある自然が、ただ限らない恩恵をもたらすだけでなく、時として牙を剥いて襲いかかってくる時、これらのほとんどの短歌が粉碎され、押し流され、消失する、立つべき根の脆弱なものであることは否定できないだろう。しかし地方の短歌誌には、まだその余力が残っているように見える。

(五十嵐勉)

## 再び歌よみに与ふる書

正岡子規

連載第二回

紀貫之は下手な歌詠みで、『古今集』はくだらない和歌集です。その貫之や『古今集』を崇拜するのは実に気の知れないことだと言うものの、実はこう申す自分も数年前までは『古今集』を崇拜する者の一人でしたので、今日世の中の人が『古今集』を崇拜するおもむきは、よく理解できます。崇拜している間は、誠に歌というものは優美である

ので『古今集』はことにそれが抜きん出ているその粹ともいべきものとはばかり思いこんでおりましたが、三年の恋意気地のない女に今まで馬鹿されていたのかと、悔しく、また腹立たしくなってしまうました。まず『古今集』を手にとって第一枚目を開くと、ただちに「去年とやいはん今年とやいはん」という歌が出てきます。これは実にあきれ返った無趣味の歌です。日本人と外国人との合いの子を、日本人と言おうか、外国人と言おうかと洒落てみるのと同じで、本当の洒落にもならないつまらない歌です。このほかの歌も大同小異で、駄洒落か理屈っぽいだけの歌にすぎません。それでも強いて『古今集』を褒めて言うならば、

と云うべきでしょう。

正岡子規



『古今集』以後においては『新古今集』がやや優れていると見えます。『古今集』よりもよい歌が見かけられます。しかしそのよい歌と言っても、指を折って数えるほどしかありません。藤原定家と言う人は、上手なか下手なか訳のわからない人で、『新古今集』の撰定を少しは歌の訳がわかっていのかと思う反面、自身の歌にはろくなもの

がありません。「駒とめて袖うちほらふ」「見たせば花も紅葉も」などが人にもはやされるくらいのもにすぎません。定家を狩野派の画師にたとえれば、狩野探幽とよく相似しているように思えます。定家に傑作なく、探幽にも傑作なし。しかし定家も探幽も相当に錬磨の力はあるので、どんな場合でもかなりやりこなします。両人の名譽は並ぶだけの位置にあつて、定家以後歌の門閥が生まれ、探幽以後

つまらない歌集ではあるものの万葉集以外に一風を成しえたところだけが取得でしょう。どんなものでも最初にやったものは珍しい気がするものです。ただ、これを真似るだけや芸とする後世の者こそ、気が知れません。それも十年か二十年のことならともかく、二百年経つても三百年経つてもその糟粕を嘗めていた不見識には驚きます。後に続いて何代集の彼ん代集のと言つても、皆『古今集』の糟粕の糟粕の糟粕の糟粕ばかりです。

貫之でも同じことです。歌らしい歌は一首も見ることができません。かつてある人に次のように言ったことがあります。その人が「川風寒み千鳥鳴くなり」の歌はいかがですかと言われて、閉口しました。この歌だけは趣味のあるいい歌です。しかし他にはこれに匹敵するような歌は一首もありません。「空に知られぬ雪」とは駄洒落にすぎません。「人はいさ心もしらず」とは、浅はかなる言わざまで。ただし貫之はこのようなことを初めて言った者です。で、個人の残りかすというものはありません。漢詩に喩えて言うならば、『古今集』の時代は、宋の時代に似ていると言すべきでしょう。俗気が紛々としているところはとも唐詩と比べられるものではありませんが、そうは言つても、それを宋の特色として見れば、全体の上で変化があるのがおもしろく、宋はそれでいいのであつて、それを本尊としてその短所を真似る寛政以後の詩人こそいい笑ひ者

画の門閥が生じて、両家とも門閥が生じて以後は、腐敗しました。いつの時代でも、技芸において歌の格、画の格などと言う格が決まつてしまつたら、もはや進歩などしなくなるものです。香川景樹は、『古今』貫之崇拜で、見識の低いことは

今さら申すまでもありません。俗な歌の多いことも無論です。しかし景樹には良い歌もあります。自分が崇拜する貫之よりも良い歌もあります。それは景樹が貫之よりえらかったのかどうかはわかりません。ただ景樹時代には貫之時代よりも進歩している点があると言ふことはまちがいありません。したがつて景樹に貫之よりも良い歌ができるのも、自然のことと言えましょう。景樹の歌がひどく玉石混淆であるところは、俳人で言うところの藁太に比べるのが適当と思われまふ。藁太は雅俗巧拙の両極端をそなえた男で、その句に両極端が現れています。かつ満身の覇気でもって世人を籠絡し、全国に夥しい門派の末流を持つていたところなどもよく似ていると思ひます。景樹を学ぶなら、良いところを学ばねば、はなはだしい邪路に陥るでしょう。今の景樹派などと言うのは、景樹の俗なところを学んで、景樹よりも下に連なっているものなのです。縮れ毛の人が束髪に結んでいるのを良いことと思つて、束髪に結ぶ人はわざわざ毛を縮れ毛にするようなものです。このところをよく広い眼を開いて判断すべきでしょう。古今上下東西の文学などをよく比較して御覧になり、くだらない歌書ばかりを見ていては、容易に自己の迷いを醒ますのは難しく、見るところが狭ければ、自分の汽車の動くのを知らないで、隣の汽車が動いているように見えるだけの人となつてしまつてしまうよう。不尽。

(明治三十一年二月十四日)『日本』掲載